

## 自然災害

### 阪神淡路大震災 一九九五年

日本のアスベストの広範な使用の結果のひとつは、神戸、淡路、芦屋、西宮、及びそれらの周辺地域を襲った一九九五年の阪神淡路大震災の後に見ることができた。

環境庁（日本）の地震後の大気モニタリングの結果により、被災地区の大気中のアスベスト濃度が高くなっていることが分かった。一六のサンプル地点において地震で破壊された建物に存在していた吹き付けアスベスト断熱／耐火材がこの汚染にどの程度起因していたのかを評価するために、拡散モデルが使用された。

科学者らは、地震前に被害を受けた建物には三、七四〇トンの吹き付けアスベストが使われており、地震により二六・四kgのアスベストが環境中に放出されたと推定している。<sup>\*</sup> 実験によればアスベストの事前除去なしに解体を行うと、周辺地域に高濃度のアスベスト放散が起きる。また、アスベスト除去費は全解体費用の六八〜九四%を占める。

---

\* [原注75] 吹き付けアスベスト耐火被覆と断熱材は日本では広く使用された。吹き付けアスベスト製品のあるものは1975年に禁止されたが、アスベスト繊維の濃度が低い吹き付けアスベスト製品のあるものは1995年まで使用され続けた。政府3省庁により実施された吹き付けアスベストによる公共施設の汚染調査により、最も影響がある建物は、国立大学、私立学校、公立大学及び病院であった。一方、日本における吹き付けアスベスト製品の量は不明であり、アスベスト含有建材は4,000万トンと推定されている。